

SHOW HEY シネマルーム

オカンの嫁入り

2010年・日本映画

配給/角川映画

110分

2010(平成22)年7月15日鑑賞

角川映画試写室



監督・脚本：呉美保

原作：咲乃月音『さくら色 オカンの嫁入り』(宝島社文庫刊)

出演：宮崎あおい/大竹しのぶ/桐谷健太/國村隼/絵沢萌子/林泰文/斎藤洋介

👁️👁️ みどころ

「新旧演技派女優」が母娘役で共演！前半は宮崎あおいのふくれっ面が目立つが、そりゃ一体なぜ？それは本作のタイトルからも推測できるが、カワイイ系の大坂風肝っ玉かあさん(?)を演ずる大竹しのぶの真の心根は？

パニック障害という設定や後半のあっと驚く展開は多少つくりモノ風だが、白無垢をポイントにしたストーリー展開は十分面白い。こりゃきっと、おおさかシネマフェスティバルの大賞候補に？

-----*

■注目は、新旧演技派女優の共演！■

大竹しのぶのデビューは浦山桐郎監督の『青春の門 筑豊篇』(74年)で、彼女が17歳の時だが、私はその鮮烈なイメージを今でも強く覚えている。その後も『事件』(78年)や『黒い家』(99年)での演技は特筆モノで、かつての天才演技派少女は今や円熟した大女優となっている。他方、『NANA—ナナー—』(05年)の演技でいきなり私の目を奪ったのが宮崎あおい(『シネマルーム8』192頁参照)。私はそこで、「今後の活躍が期待されるかわいいう若手女優として、私の頭の中にもインプットしておこう」と書き、星4つをつけたが、その後の活躍は特筆モノ。私が観た宮崎あおい出演作で星5つをつけたのが『初恋』(06年)『闇の子供たち』(08年)星4つをつけたのが『好きだ。』(05年)『ただ、君を愛してる』(06年)『海でのいなし。』(06年)『劔岳 点の記』(08年)そして星3つが『初雪の恋 ヴァージン・スノー』(07年)『少年メリケンサック』(09年)これだけでも、私の宮崎あおいへの注目度がわかっていうものだ。ただ、一般的にはNHK大河ドラマ『篤姫』の評価が高いが、私にはイマイチ。そしてまた、最新の『ソ

ラニン』(10年)の出来は星2つと最悪……。本作はそんな新旧演技派女優が母娘として共演するから、まずはその2人に注目！

■前半はふくれっ面ばかり、そりゃ一体なぜ？■

宮崎あおいは何をやってもサマになる珍しい女優だが、前半は月子(宮崎あおい)のふくれっ面ばかりが目立つ。父親の顔を知らないまま生まれ、25歳の今日まで2人で暮らしてきた母親・陽子(大竹しのぶ)が、突然若い男・服部研二(桐谷健太)を家の中に引っ張りこんできたうえ、陽子はシャーシャーと「わたくし森井陽子は、昨夜、プロポーズされて・・・お引き受けしました」と宣言したから、月子の頭の中は混乱するばかり。そのため、月子は家族同然のつき合いをしている大家のサク(絵沢萌子)の部屋にプチ家出をしたが、サクは簡単に月子の話と研二そのものを受け入れてしまったから、月子はますます混乱。サクの言うところでは、月子のイライラは月子のやきもちだというのだが・・・？

さらに、陽子の勤め先の整形外科医院院長・村上章先生(國村隼)も、最初は月子の話聞いてビックリしていたものの、これまた意外にスンナリ研二を受け入れてしまったから、月子のふくれっ面は収まるところがない。

ふくれっ面といえば、両親がキョーサン主義にかぶれてしまったことに不満を持つ『ぜんぶ、フィデルのせい』(06年)における9歳の主人公の女の子のふくれっ面が印象的だったが、宮崎あおいのそれともなかなかなもの。前半はそんなストーリー展開を楽しみながら、月子のふくれっ面をじっくり味わおう。

■なるほど、こんなパニック障害も■

この映画は、夜中の3時に酒を飲んで、男を連れ玄関をたたきながら、「月ちゃん、おーみーやーげー。おーい、娘よお、起っきれーい」と叫ぶシーンから始まる。月子は仕方なくふとんの中から起き出して陽子を部屋に入れ、玄関で眠る研二には毛布をかけてやったが、翌朝起き出しからの月子の行動が普通と違うことに注目！つまり、普通のOLなら、たとえ前の晩に何があっても、朝はちゃんと7時前に起きて身支度を整え、仕事に出かけなければならないはずだが、月子の朝の仕事は愛犬ハチを散歩に連れていくことだけらしい。それは一体なぜ？

それは回想シーンとして説明されるが、このとってつけたような長いシーンの挿入には少し違和感がある。それはともかく、そこでわかるのは、新しく会社に入ってきた一見エリートサラリーマン風の男・本橋信也(林泰文)から受けたストーカー被害によって、月子は電車に乗れなくなってしまったらしいこと。弁護士を目でみれば、非は明らかに本橋にあるから、会社を辞めるのは月子ではなく本橋のはずだが、今の世の中ヘンな裁きばかり……。こんな体験のせいで2度と電車に乗ることができなくなったとしたら、月子の前途は？ある日、ある時、最悪の状況下(?)でそんな心配をめぐって母娘のバトルが展

開されるが、その理解のためにはなるほど、こんなパニック障害もあるんだということを引きちゃんと認識しておく必要がある。

■□■女はいつまでも白無垢に憧れる動物？■□■

本作における大竹しのぶの芸達者ぶりは、酔っぱらい方や研二とのいちゃつき方（？）などに顕著だが、シリアスシーンにおける説得力には妻味がある。本作は研二の突然の登場と陽子の結婚宣言によってはじめて生じた母娘の亀裂とその回復、そして後半に訪れるあっと驚く展開による感動がストーリー展開の軸だが、そのポイントになるのが白無垢。そう、今ドキあまり流行っていない、花嫁衣装の白無垢だ。

月子の父親、つまり陽子の夫・薫のことを「薫さんは最初で最後の人やねん」と言っていた陽子が、なぜ金髪でリーゼントのヤンキー男・研二に惹かれ、結婚までOKしたの？それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、結婚式を白無垢で挙げるのが陽子の小さい時からの夢だったと聞いて、月子はビックリ。五十面を提げて30歳の若い男と再婚するのに、何が白無垢やねん！と思ってしまうが、女はいつまでも白無垢に憧れる動物？突然のそんな申し入れに戸惑う月子に対して、「やっぱあかんよなあ、みっともないよなあ」「うっそ、冗談、忘れといて」とフォローする陽子だが、それが本心でないことは明らかだ。さあ、陽子の白無垢姿は、いつどのような形で実現するのだろうか？



©2010「オカンの嫁入り」製作委員会 配給：角川映画

■□■おおさかシネマフェスティバル大賞の有力候補に！■□■

私はここ3年間おおさかシネマフェスティバルのベストテン選びの投票役をつとめている。これは1年間に200本以上の映画鑑賞をした人に与えられる特権だが、そこで選ば

れた過去3年間の邦画の大賞は『松ヶ根乱射事件』(06年)『トウキョウソナタ』(07年)『ディア・ドクター』(08年)つまり、おおさかシネマフェスティバルの特徴は「大阪らしさ」「関西ゆかりの」という点に注目したベストテンや個人賞なのだ。

しかして、本作はタイトルからもわかるとおりのコテコテの大阪映画? そんなことはないが、本作の舞台のほとんどは月子と陽子の家そして自転車で通う駅。したがって、私は一生懸命その所在と駅名を見つけ出そうとしたのだが、映画はそれを巧妙に隠している。このセットは東映京都撮影所の中にあるもの、そして駅は京阪牧野駅らしいが、それを露骨に見せないところがミソだ。宮崎あおいも大竹しのぶも東京出身だが、関西弁はなかなかのもので、呉美保監督もそのセリフ回しにはかなりこだわったらしい。しかして、本作における大竹しのぶは『大阪ハムレット』(08年)における松坂慶子のような純大阪風肝っ玉かあさんではなく、カワイイ系の肝っ玉かあさん? 後半のあっと驚く展開を含めて母娘の織りなす人間ドラマが大きな感動を呼ぶことはまちがいないから、本作はきっと今年のおおさかシネマフェスティバル大賞の有力候補に!

2010(平成22)年7月17日記

これも監督特権? おじさんは大ショック!

『愛のむき出し』(08年)で注目した女優が満島ひかり。こりゃ宮崎あおいに続く若手ナンバー1の逸材と見込んだとおり、今や若手女優のトップランナーに躍り出た。石井裕也監督の『川の底からこんにちは』では絶世の美女ぶりを封印し、しじみ採り作業員の白い帽子と白い作業着姿が目立ったが、李相日監督の『悪人』ではそれと正反対の性に奔放なイケイケ女の子を熱演した。沖縄出身の彼女は85年生まれだから、まだ24歳。これからどんな大女優に成長するかと期待していたところ、去る10月26日に石井裕也監督との結婚を発表したから大ショック。監督と主演女優が恋におち、そのまま結婚というパターンは多いが、大阪芸大卒、ピアフィルムフェス

ティバル07年でグランプリを獲得した石井も27歳と若い。09年5月に始まった撮影中から交際を始め、クランクアップ時には同棲していたというから、やっぱり若い男はいい女に手が早い。「満島は妊娠しておらず今後も仕事を続ける」らしいので少し安心だが、期待の若手女優を独り占め(?)するとは! 若手の監督仲間からは人気女優を射止めた石井監督を「希望の星」と呼んでいたそうだが、おじさんの目から見てもまさにそのとおり。もっとも最近の若いモンは、くつつくのも早い! が別れるのも早い。お二人はゆめゆめそんなことのないよう。子づくりは急がず、立派な映画づくりを優先させてもらいたいものだ。

2010(平成22)年10月30日記